

平成 26 年（第 3 期）事業報告書

（平成 26 年 1 月 1 日～12 月 31 日）

公益社団法人 国際 IC 日本協会

事業活動の概要

公益事業 1 国際会議の開催による国の健全な発展及び世界平和に資するための事業

実施期間：6 月 20 日（金）～22 日（日）

「Celebrating Diversity—多様性を力に変えよう! —」のテーマの下に BumB 東京スポーツ文化館で開催された第 36 回 IC 国際会議は、日本在住の各国からの留学生等を合わせ 13 か国・地域から様々な宗教・文化・年齢などの背景を持つ 89 名が参加（前年の参加者 82 名）したが、その多くが青年たちであった。

来日した IC インターナショナルのモズーク会長は、「世界各地の紛争を解決するために、一人ひとりが生き方をチェンジし、国籍・人種・宗教・文化・世代・ジェンダー等の違いを超えて、相互信頼のための架け橋を築くような生き方が求められている」と語った。エジプト出身のイスラム教徒で、現在、イギリスに住んでいるモズーク会長自身も、「欧米の人々がイスラム文化への理解を深め相互の信頼が進むようにすることが自分の使命の一つです」と、その取組や体験を披露してくれた。ゲスト・スピーカーとして参加した、アフメット・シャラ駐日コソボ大使は、「セルビアとの紛争を経て独立した現在も、多くの異なった民族が共存していけるための国づくりが大きなチャレンジですが、そのことに努めています」ということを様々な体験から語ると共に、「リーダーたちが変革をもたらすのを待つのではなく、個人から個人への働きかけを自分一人からでも始めよう」といったマザー・テレサの言葉を引用し、一人ひとりが行動を起こすことを促した。又、「先ず自分の周りをきちんとできない人に平和作りを語る資格はありません。今朝、ベッドをきちんと整えましたか？」と参加者に問いかけた。

このフォーラムでは、お互いの多様性を認め合うことにつながる多くの体験を聞いた全体会議や、各人が深く関心を持つテーマについて自由に話し合えるオープン・スペースといった時間に加え、IC の掲げる、絶対正直・絶対純潔・絶対無私・絶対愛という精神に自分の在り方を照らし合わせ、心の奥の声に耳を傾け、静かに内省する時間（Quiet Time、静かな時間）、様々な人たちが小さなグループで深い話し合いができたファミリーグループの時間、そして、多様な文化の存在を正に祝うような、「文化の夕べ」といった楽しいプログラムが設けられた。また、歴史的な経緯から現在も難しい国際関係が続いている、韓国や中国と日本の青年たちが共に並び立ち、体験を語り、お互いの友情を示し、参加者に来々への希望を与えた。

参加者からは次のような感想が寄せられた。

「私にとって一番大きかったかな、と思うのは、『自分からコミュニケーションとりたい!』と 2 日目に思えたことです。初日には『受け身な自分が嫌だな!』とっていました。『自分から』とい

うのは、Quiet Time に自分と向きあって出てきた気持ち。これと同時にいろんな恐怖心がなくなった気がして。それよりも新しいことに触れること、自分を知ってもらうことをやりたいと思うようになりました。こうやって自分の気持ちが変わってからは、楽しさが何倍にもなって、心も解放されたような感じですごく良かったです。この経験が私のこれからに良い影響を与えることは確かです！」（日本人大学生）

「このフォーラムから多くのことを学びました。モズークさんが言われた、『人を盲目的に、あるいはステレオタイプで判断するのではなく、それを相手への好奇心に換える』ということを決して忘れないようにしたいと思います。とはいえ、私はまだまだ、ステレオタイプで人を捉えてしまいがちです。しかし、このフォーラムのテーマのように多様性を認めるとき、それを祝福できるようになると思います。このフォーラムを通して、色々な宗教や文化の違いについても学ぶと共に、自分を深く内省することも学びました。初めて、自分の文化についてもっと知りたいと望み、また、初めて自分の意志でスピーチをしようとも思ったのです。同時に、誤解に基づく多くの涙を見て、中国と他の国々に友情の橋を架けるために何かをしたいと思いました。このフォーラムで多くの感激を得、多くを学び、大きく変わったと共に、たくさんの素晴らしい友人たちを得ることができました」

（中国からの留学生）

「自分の目の前で起こっている辛いことや苦しいことは実に小さいことだということが分かりました。ここに生きていて、一生知ることがなかったかもしれない方々とここで出会えたことに素直に感謝できました」（日本人大学生）

「自分の今の立場や価値観から、様々な選択をするだけでなく、色々な世代の人、国の人の話を聞くことで自分の考えが広がったし、将来に対する不安が少なくなった」（日本人大学生）

公益事業 2 青少年の健全育成事業

ア. 学校訪問プログラム

実施期間：5月7日～7月7日

概要：今回は、ICの国際青年リーダー育成プログラム等の訓練を受けた、インド・インドネシア・コソボ、そして日本の青年からなる次の4名のチームで学校訪問を行った。5月初旬に東京に集結し、チームづくりの後、約2ヶ月に亘り各地の小学校（インターナショナル・スクールを含む）から大学まで32校（前年は36校）を訪問した。交流会では各国の映像を見たり、又、実際に民族衣装を着てもらったり、それぞれの国旗の意味や挨拶の言葉を習ったりというような各国の文化の理解の部分と、寸劇やICのメッセージソングやメンバーのチェンジの体験の紹介等を通してのこころの教育の部分で構成されたプログラムを提供し、訪れた各校の児童・生徒、そして先生方にも大変好評を得た。又、本年からは、小学生は、5・6年生を主な対象にし、連続して2コマの授業の枠を得、1時間目はIC側からのプレゼンテーション、2時間目は生徒からの発表や文化紹介等、双方向の交流が出来る学校が増えた。

学校訪問ボランティア・メンバーの紹介

1. アツヌオ・ヒエカ (Ms. Atunuo Hiekha, イト)

1986年にインドのナガランドで生まれる。姉がICとの関わりでチェンジし始めたことで、家族が

それぞれチェンジを経験し、自分も自らの在り方を改めるようになった。又、異なった文化を持つ様々な人々のライフストーリーに触れるたびに多くを学び、自分のチェンジも深まっていった。インドでのICの諸会合や、2012年にナガランドで開かれたIC国際青年会議と2013年に韓国で開催されたICアジア・太平洋青年会議（APYC）に参加。社会学の修士号を修め、高校で2年間社会科を教えた体験も持つ。紛争と平和、環境の問題に関心が深く、現在大学院への進学を準備中。初めての来日。クリスチャン。

2. ユディ・セプティアワン (Mr. Yudi Septiawan、インドネシア)

1989年インドネシアで生まれる。2009年、IC国際青年キャンプに参加。2010年にマレーシアで開催されたICアジア・太平洋青年会議（APYC）に参加、4つの道義基準に自分の生き方を照らし合わせてチェンジを決意。カンボジアやヴェトナムで開かれた青年を対象としたICの研修コースの運営にも参画した。ICインドネシアのコーラスグループのコーディネーターを務め、ギターなど楽器の演奏も行う。現在、インドネシア大学の大学院で国際関係を学ぶと共に、英語も教えている。初めての来日。イスラム教徒。

3. アルバー・フェテュー (Mr. Arber Fetiu、カナダ・コソボ)

1984年コソボで生まれる。2009年カナダでICに出逢う。ナイジェリアでの宗教の違いから起こった紛争を乗り越えて融和をもたらそうと協力するイスラム教とクリスチャンの宗教者2人の実話を題材にした『Imam and Pastor (イスラム教導師と牧師)』というICの映画に深い感銘を受け、ICチームとケベック州各地で上映会の実施に携わる。2011年、スイス・コーのIC国際会議場で紛争解決について学ぶ青年対象のプログラムに参加したのを始め、2012年、2013年のICスイス・コー国際会議にも参加。政治学の修士号を修め、現在も勉強中。コソボの教育・スポーツ・技術省のプロジェクトのアドバイザーも務めた。コソボで生まれ育ち、トルコにも暮らし、現在カナダに住むという経験から、多くの言語にも通じ、異文化への理解が深い。初めての来日。イスラム教徒。

4. 木村 美香 (Ms. Mika Kimura、日本)

1988年生まれ。大阪府立大学（4年生）を2014年3月に卒業（教育学と心理学を専攻）。2011年7月から1年間大学を休学し、各国からの青年と共に様々な国の音楽や踊りを取り入れたショーを作り世界各地で公演を行う“Up With People”（アメリカのNGO）の活動に参加し世界8か国を訪問。公演の他にも学校を訪ねるなどのボランティア活動も行った。又、2012年に日本で開催された第18回ICアジア・太平洋青年会議（APYC）、及び、2013年の第10回東北アジア青年会議に参加した。異文化理解の意義と課題に関心を持ち研究をしてきた。

(1) つくば市訪問

5月15日～16日

つくば市立上郷小学校・今鹿島小学校・沼崎小学に加え、つくばインターナショナル・スクールも訪れた。「とても興味深そうに話を聞いたり活動したりしていた。休憩時間や給食の時間にも、児童の方からコミュニケーションを図ろうと近づいていく姿が見られた」等の先生のコメントがあった。

(2) 静岡県での 学校訪問

5月19日～23日

今年はず昨年・一昨年に次いで静岡県教育委員会の正式招請による3回目の訪問となった。今回は、初めて静岡県東部地区の三島市・函南町・伊豆の国市にある県立三島北高等学校、函南町立東小学校・丹那小学校・東中学校及び県立東部特別支援学校を訪問し、それぞれ趣向に富んだ双方向の交流授業が展開された。函南町立東中学校では、対象となった1年生5クラス200余名の生徒が5つのテーマ「函南町の有名人」・「函南町の特産品」・「函南町の観光地」・「富士山」・「自校・東中学校の紹介」で、それぞれに調査した内容のプレゼンテーションを4グループに分かれて行った。終了後、担任の先生より「外国青年に向けた、自分達の住む町や学校の紹介にも生徒達自身による事前調査や発表方法に創意工夫が見られ、プレゼンテーションに於ける課題が見えてきた」というコメントがあった。また、県東部特別支援学校では、小・中・高等部の生徒達との多様な交流と合わせて、専門職員との質疑応答を通じて障害児教育の現状と背景について相互に学び合うことが出来た。ここでは5つの新たなホスト・ファミリーにお世話になり、青年達は日本の一般家庭の生活文化を体験すると共にそれぞれの家族や知友人との間で深い交流が行われた。

(3) 小田原市での学校訪問

5月24日～30日

小田原市では、2009年以来小田原市教育委員会の正式招請と仲介により、市内25校の小学校全校を対象に学校訪問が行われてきた。本年は、従来の1日2校から1日1校になり、授業数も1コマから2コマになったことにより、2コマ目での学校側主導（先生の指導と生徒の事前勉強の協働作業）による日本文化（遊び・歌・ゲーム・観光スポット）の紹介や、外国青年の出身国についての事前勉強の成果が質疑応答の中で活かされ、これまで以上に交流授業の意義が実感された。滞在期間中、小田原市大野副市長と栢部教育長への表敬訪問が行われ、それぞれより深甚なる感謝の念が述べられた。小田原市では、期間中「ホストファミリーへの感謝の夕べ」が毎年IC小田原サークルの主催により開かれているが、今年の感謝の夕べでも4家族と知友人らを交えて市内の学校訪問の体験やホストファミリーとの生活体験のエピソードなどが紹介され親交を深め合った。

(4) 福岡県、佐賀県での学校訪問

6月1日～12日

最初に訪れた北九州市では、今回も小倉東ライオンズクラブの全面的な支援を受け、北九州市教育委員会を通じてアレンジされた、市立花房小・市立高須中・市立江川小・市立洞北中学校を訪れ、プレゼンテーションを実施した。

『文化や言語の違いはあっても、それとは違ったところで1つになれる力を感じた』という生徒や、『異なる文化について知ることにより、お互いの文化を尊重する気持ちをもてた』という生徒もいました」という先生の感想も寄せられた。又、北橋健治市長と垣迫裕俊教育長には、それぞれ学校で行ってきた家庭での問題とその解決をテーマにした寸劇を披露したが、「これほどこの家でもおこりうること」と話され、その後の会話が弾んだ。

引き続き、福岡市では、中村学園短期大学・香蘭女子短期大学・ILPお茶の水医療福祉専門学校を訪れて交流した。大学生を対象としたプログラムには、自分のこれまでの生き方を見直し、新しい気付きを得られるようなワークショップ的な要素も加味されていた。福岡市の大学生たちからは、「今日一番大事だと思ったことは、自分の考えをはっきりと相手に伝えること、きっかけひとつで自分の人生や考え方が変わったり、冷静に自分を見つめ過去を振り返ることができるということ」を学んだ。だから私も行動したい。障害物を取り除いても次々に出てくるものだからひとつずつ取り

除いていくことが大事だと思った」、「今日の話聞いて、自分の殻に閉じこもっては駄目だ、もっと自分から積極的に話せるように努力しようと強く思った」、「世界は広いし、もっと視野を広く持ち今後いろんな人と親しくなりたい」、「自分が自国の素晴らしい文化などを知らないのは、悲しいことだと思った。自分が自分の国のことを外国の人に説明することは難しい。もっと自国の良いところを学ぶ、あるいは知ろうと思った」などの感想が寄せられた。又、「今回の国際交流を体験して、異文化や課題などを直に学び、多くの学生が世界共通語としての英語を直に感じ、英語を学び直して外国人とコミュニケーションを取れるようになろうと思ったこと、又、人種差別、宗教間の争いなどを身近な問題としてとらえられたのは大きな成果であった」との先生からのコメントもあった。

又、佐賀県の西九州大学（3回目）を訪れ交流した他、弘学館中学（2回目）に加え、小城市立三日月小学校を訪れプレゼンテーションを行った。「子ども達には好評でした。特にそれぞれの国の紹介で、いろいろな文化の違いを感じ取った子が多かったです。又、来てほしい、自分も外国に行ってみたいという感想が多く見られました」、「劇の場面では、国は違っても、相手を思う気持ちは同じということ、そして、それをどう行動していったらいいかを考えさせていただいたことは、子どもたちの心の中に残っていったようでよかったですと思いました」等の報告が先生方から寄せられた。又、葉隠発祥の地や柿右衛門窯に案内頂くなど、海外からのボランティアたちは日本の文化にも触れることができた。

(5) 広島訪問

6月13日～14日

広島修道大学を訪れ、留学生や日本の学生たちと交流した。また、広島平和記念資料館を学生の案内で見学し、改めて戦争の悲惨さと平和の大切さを実感した。

(6) 名古屋訪問

6月15日～17日

今回は昨年続き名古屋市立名北小学校を訪問し6年生との交流会を持った。校長先生からは、「前任校で今まで色々な国際交流の行事を体験してきたが、今回の皆さんのプレゼンテーションには感激した。多くの学校でこのような体験をさせてあげて欲しい」とのコメントがあった。

(7) 福島での学校訪問

6月26日～27日

福島大学災害ボランティアセンターでボランティア活動に取り組む学生たちとの交流が行われ、海外からのボランティアの青年たちも福島の現状への理解を深めた。翌日には、学生のアレンジにより、森谷仮設住宅での被災者の方々との交流会が開かれたが、被災者の方々は各自の体験を話して下さると共に、コソボのアルバーさんの内戦の経験などの話にも熱心に耳を傾けてくれ双方向の深い交流ができた。

(8) 東京での学校訪問

6月24日及び6月30日～7月4日

啓明学園（高等・初等・幼稚園）、大田区立道塚小学校、杉並区立杢掛小学校、及び一橋大学を訪問し、プレゼンテーションを行ったり、生徒たちからの日本の文化の紹介を受けたりと、いろいろな形で交流を行った。「世界の色々なバックグラウンドを持っている青年たちが国境を越えて平和のために活動していることがわかり、生徒たちはとても力づけられました」とのコメントが先生

から寄せられた。又、学校訪問の合間には、大学生を始めとした青年達との交流も重ねられた。

(9) 日本への理解の深まり

東京での滞在を振り出しに、つくば・静岡・小田原・福岡・佐賀・広島・名古屋への訪問・滞在中を通して、日本の多くの伝統文化にも触れた。又、各地でホームステイの機会を得たが、日本の文化に深く触れると共に、ホスト・ファミリーの方々との間に深い絆が生まれた。静岡でのホスト・ファミリーの方からは、「大阪出身の美香さん、インドからのアツーさん、わずか3泊の短い期間でしたが、我が家の3人娘が5人娘になって、この生活がずっと続いてもいいなと思うくらいでした。・・・このような青年の方々が、又、これからも世界の多くの若者達とふれ合う機会をつくって下さり、我家の娘たちのような感動を受けることにより、世界平和が一歩ずつでも進みますことを心より願っております」といった手紙も寄せられた。このような毎年の学校訪問のプログラムで来日し、日本の良き友人となった青年たちは徐々に各国に広がり、日本の青年たちが彼らの国を訪れた時も本当に親身になって世話をしてくれる。今回の3名の海外からのボランティアも、それぞれ多くの親しい日本人の友人たちを作り、帰国後もそれぞれの国と日本の良き架け橋となっている。インドネシアのユディさんは、「今後インドネシアでもこのような学校訪問プログラムをスタートさせたいのでもっと詳しく知りたい」と様々な質問を投げかけてきた。

イ. インターンシップ・プログラム

< 招聘プログラム >

9月26日～10月20日

ヴェトナムのパン・タンタムさんを9月26日から10月20日まで招聘した。その中で本年5月に学校訪問した静岡県東部の函南町立東中学校の3年生の英語クラスに於いて、「自己実現に向けてのファーストステップ」と題して自身の生い立ちとICとの出会いを通じての父娘関係のチェンジの体験を語ってもらった。講話を聞いた中学生からは、「家族への感謝の気持ちを持つというすごくいいお話だった。・・・パンさんの昔の様子が本当に私と似ていて、自分のことのようにも聞けた。親に感謝の気持ちを持って素直になるのは難しいけど、できるだけありのままの自分でいられるようにしたいと思った。そして、自分の内面とも向き合う時間も大切にしたい」といった感想が寄せられた。

又、IC交流会でも自身のチェンジの体験を語ってもらった他、大学生を始めとした多くの青年たちにも多くの体験を伝えてもらった。更に、多くのホームステイ先の家族との交流等を通して、ヴェトナムと日本の文化についても学び合った。

公益事業3 個人と家庭の健全な発展に資するための事業

ア. ICセミナー

10月12日

【概要】忙しい毎日の中で時には立ち止まって、自分の心のありようをみつめることが必要とされる。心を開いて、人の話に耳を傾け、自分の人生を語ることにより、自分の人生で直面している課題を整理し、前に向かうことができる。このICセミナーは、生きる力の源となる心を育て合う場となることを目指して開催されている。

『こころのリフレッシュをしましょう!』のテーマの下、ICオフィスで開催されたICセミナーには、韓国のICの専従者である、チョン・ヨンヌク氏とチョン・ジスンさん、ベトナムからのIC

インターンのタムさん、中国とマレーシアからの留学生各1名を含む15名が参加した。多様な背景を持つ参加者は、人間関係をどのように改善したかという事例に耳を傾け、40才以上、40才以下という2つのグループでの討論を行ったり、小さなグループに分かれて、自分のこれまでの人生について率直に語り合った。

イ. ファミリー・ワークショップ

今期は開催せず。

ウ. 各種交流会

概要：アジアの人々を始め、各国の人々との相互理解と信頼を深めるために留学生や在日外国人を交えた勉強会や交流会等を行う。又、ICの精神やその実践による体験等分かち合うことにより学び合う。

(1) IC 交流会 次のテーマ及び日程で計16回（前年は11回）開催された。

① 「本年の主な事業計画について」	1月19日	13名
② 「最近、自分が学んだこと」	2月2日	18名
③ 「多様性とは」	2月16日	10名
④ 「私の夢」	3月16日	10名
⑤ 「IC国際フォーラムに向けて」	4月6日	10名
⑥ 「文化の多様性について」	4月20日	19名
ゲスト・スピーカー：五十嵐 勉氏(作家、アジア文化社 代表取締役)		
⑦ 「コソボ、インド、インドネシアからのボランティアを迎えて」	5月18日	18名
⑧ 「IC国際フォーラムに向けて」	6月1日	11名
⑨ 「IC国際フォーラムに向けて」	6月15日	16名
⑩ 「マズーク IC国際ナショナル会長を囲んで」	6月25日	24名
⑪ 「コソボ、インド、インドネシア、日本からの学校訪問ボランティア4名の報告」	7月5日	30名
⑫ 「福島での原発事故を教育に活かすために」	7月20日	14名
ゲスト・スピーカー：ピシット・ポロン氏(カンボジア、オーストリア IAEA 勤務)		
⑬ 「第20回 APYC、第10回東北アジア青年フォーラム、コー世界大会への参加報告」	9月21日	24名
⑭ 「私のチェンジの体験」	10月19日	13名
ゲスト・スピーカー：パン・タン・タム(ヴェトナム、会社員)		
⑮ 「アフリカの持続可能な発展のために」	11月16日	13名
ゲスト・スピーカー：エマニュエル・ムティシャ氏(ケニア、東京大学プロジェクト・アシスタント・プロフェッサー)		
⑯ 「今年一年を振り返って」	12月21日	13名

公益事業4 国際相互理解と友好を促進するための共同事業

ア. 第11回東北アジア（日中韓）青年フォーラム

8月25日～30日

韓国MRA/ICの主催の第11回東北アジア（日中韓）青年フォーラムが、韓国政府女性家族部の後援を受けて、『青少年の言語文化の現実とその改善方法を考える』のテーマの下に開催された。日本からは、共立女子・慶応義・國學院・上智・津田塾・南山・一・山口・立教・立命館アジア太平洋・早稲田の計11大学の学生を始めとした青年20名（前年は19名）が参加し、中国からの24名、韓国からの40名の学生たちと、設定されたテーマに加えて、日中韓の問題についても真摯に意見交換を計り、参加者同士に深い友情が築かれた。日本の参加者からは、「この活動を通して誤解を解いて、それぞれの考えを確認して、フォーラム参加者はそれぞれ国籍を超えて、そのような体験を身を以て共有した戦友として、心の深いところで結ばれた」、「実際に韓国・中国の人たちと話してみて、自分の今までの認識が現実とずれていることに気づいた。それと同時に、対話がどれほど大事なものなのかを痛感した」、「もともとはラテンアメリカにしか興味がなかったが、帰国後、韓国語の勉強を始めた。参加前、そのような自分は想像すらつかなかった。このフォーラムを通して、価値観が大きく変わった」等の感想が寄せられた。

イ. スイス・コー国際会議

6月30日～8月13日

『世界の変革に資する人間的な要素を探る』という総合テーマの下、6月30日から8月13日まで7つのテーマで国際会議が開催され世界中から参加者が集まった。日本からは、7月26日から8月1日まで開催された、『子供たちが社会を変えるために果たせる役割』のテーマの会議に3世代からなる3名が参加したのを始め計6名（前年は11名）が参加した。参加者からは、「今夏、小学3年の息子とコーを訪ねました。息子は初めての海外旅行。私は10年以上ぶりの海外。英語が全く話せない息子と私だけでは不安が先行。そこでコーに数回訪問経験のある母に同行願い、晴れて親子3世代での参加が叶いました。親子プログラム“子供たちが社会を変えるために果たせる役割（Children as Actors for Transforming Society (CATS)）”では、様々な分科会があり、息子は6～10歳のプログラムとシアター・グループに入り、ゲームや劇を通じ、多国籍多言語多人種ハンディキャップの子どもたちと親睦を深めました。1日目の午前中こそ緊張一杯で母や私の後ろにいたものの、午後には『来なくていいよ』と通訳なしで終日遊んでいました。幼い子供たちは、まだ母国語しか話せない子が多く、それぞれ仏・英・独・スワヒリ・スペイン・日本語等で一方的に話しても、意思の疎通が確実に図れていたのは驚きでした。特に仏人の同い年の男の子と仲良くなり『仏語を勉強する』と張り切っています。言葉は拙くても、心を通わせたい気持ちがあればコミュニケーションが取れることを実体験出来たことは、自信と今後の糧になると確信した滞在となりました。息子は来年も参加する気満々でいます」という感想が寄せられた。

ウ. 日中相互訪問プログラム

今回は実施せず。

エ. インド IC との共催のコー・イニシアティブス・フォー・ビジネス (CIB) 会議

11月12日～15日

2014年は、隔年開催のCIB定例会の中間年に当たるが、去る11月12日～15日にかけて、重要な節目となる下記の二つの会議がパンチガーニで開催された。

① CIB 運営委員会 (Central Steering Committee、11月12日～13日)

一つは、過去10有余年の実績の総括と次回(通例の2015年ではなく2016年1月23日～26日に開催予定)に向けての戦略会議。これは11月12日から13日にかけて開かれ、CIB統括責任者のサロッシュ・ガンジー氏をはじめ、インドICの最高責任者マツアー(R. D. Mathur)氏ほか主要スタッフ、CIBインドの主要5都市の支部責任者、タタ(Tata)やシーメンス(Siemens)などの責任者、マレーシアの責任者ハリダス氏ら15名が参加し、日本からは矢野会長と中山理事が出席した。

② CIB インドジャパン CSR ビジネス・ワークショップ(11月13日～15日)

二つ目の会議は、今回初めて企画されたCIBとCRT-Japan両者が共催するCSR(企業の社会的責任)を主テーマとする共同ワークショップである。インドICと日本ICが全面的にバックアップしての共催事業の一環として11月13日から15日(2泊3日)にかけて、パンチガーニで開催された。これにはインドのタタ(Tata)・シーメンス(Siemens)・トランスエーシア(Transasia)・フォルブス・マーシャル(Forbse Marshall)などの主要企業及びNPO団体関係者、経営大学の大学関係者及び学生ら48名が参加した。

今回の共同ワークショップでは、インド側代表バスカル・チャタジー博士(Dr. Bhaskar Chatterjee)による基調講演の中で、インドに於ける改正新会社法(同氏が主管)の文脈で、利益の2%(従来は1%)をCSR活動に振り向ける旨の背景と趣旨が詳しく説明された。日本側の石田寛CRT-日本委員会専務理事からは、日本では国連の諸機関やその他の国際関連機関によるCSRを各種の基準の制定を巡る流れの中で、各企業によるCSRの取組みがなされている状況が簡潔に説明された。続いて両国の代表企業によるCSRの取組み事例が報告され、次いで参加者との間で熱心な質疑応答が2日間にわたって繰り広げられた。今回の初めての共同ワークショップは、参加者にとってインドと日本のビジネス環境の違いを知る上で貴重な体験交流の場となっただけでなく、次回以降の更なる拡大発展に繋がる重要な礎石となった。また、今回の共同企画は、会議の内容・運営面では、ICの主導によるプログラムが要所に配置された。午前中の早朝ミーティングではメッセージ性のある歌と共に”内なる統治(Inner Governance)”や”人間関係(Relations)”をテーマにした「静かな時間」の演習。他に「多宗教の祈り」の共通体験の時間や伝統的な工芸品の制作現場の訪問や先進的な取組みを進める農場での実地見分が織り込まれ、ICらしさが加わると共に、CRT主導による日本側参加企業のプロフェッショナルな取組みは参加者に感銘を与えた。それらを踏まえた、閉会時に於ける元官房長官クマール(Kumar)氏の総括がこれを雄弁に語っている。「これを機に、私達は、インドと日本が両国首脳の主導の下に戦略的パートナーシップ関係の拡大発展が大きく期待される中で、CIBとしてどのように貢献していくのか」、が問われていると結んだ。

オ. 第20回アジア・太平洋青年会議(APYC)

8月2日～9日

第20回アジア・太平洋青年会議が『分裂した世界に信頼の橋を架けるための青年の役割と責任とは』のテーマで8月2日から9日まで台湾で開催された。この会議には、インド・パキスタン・バンラデシュの3か国の代表が一堂に会したのを始め、香港理工大学からの参加者25名(内10名余りは中国本土からの学生)等、アジア・太平洋地域の14か国・地域から110余名が集まった。日本からは、大学生・社会人から成る9名(前年は7名)の代表が参加した他、日本留学中のマレーシアの学生も共に参加した。1週間に亘ったプログラムでは、朝は自らの心の声に耳を傾けるセッションか

ら始まった。その他にも、市民による人権活動や環境保護、そして人間教育等をテーマにした講演を聞き考えた全体会議も開かれた。又、小さなグループに分かれて深い話し合いを行った「コミュニティ・タイム」は、国や人種の壁を越えて、本当の家族になったかのような深い絆を生んだ。その他にも、「リーダーシップ」・「ダンス」・「ヨガ」・「歌」等、様々なことを学べるワークショップへの参加、ゲームや各国の文化紹介の夕べなど楽しいプログラムも多数用意された。又、自分と家族の関係や家庭の問題を考える「ファミリー・ワークショップ」に参加した青年からは、「父親との関係を見直し、少しずつ色々なことを話すようになってきた」との報告も寄せられた。更に、日本の青年たちは、中国・台湾・香港・韓国、そして東南アジアの青年たちとお互いの国を取り巻く問題とその中で個人やグループとして何が出来るのかについて夜遅くまで真摯に語り合った。中国等からの参加者からは、「台湾や香港の青年たちが中国についてどう感じているのか良く分った」、「APYCでの様々な体験から、問題を乗り越えるためのヒントを数多く得ることができ、人生に対して新たな見方ができるようになった」等の感想があった。

公益事業5 機関紙等の発行による啓発事業

機関紙「ICたより」の編集を進め、3回発行した。

以上